



彷徨する建築

—エドワード・ゴリーの絵本構成を利用した建築の提案—

A

 t the beginning...

ゴリーは、「子供と不幸を遠ざけない絵本」を描き、日常のどこかで起こる不条理さを描いている。ゴリー絵本のアイデンティティである「独特の韻を踏んだ文章」と「モノクロ線画による挿絵」は実空間に組み込むことによって新たな体験を促すことができるのではないかと考える。本設計では、ゴリーの世界観が描写される【言語表現】と【視覚表現】を始めとしたゴリーの思想を、設計する出版社に取り入れ、出版活動を行う大人を刺激する、クリエイティブな空間設計とすることを目的とする。

W

 ho is Edward Gorey?

アメリカ生まれの絵本作家。アイデンティティである「独特の韻を踏んだ文章」と「独自のモノクローム線画」でユニークな作品を数多く出版している。ゴリーは絵本の定番を覆した誰も幸せにならない大人向けの絵本を描く。絵本に登場する子供は常に悲惨な運命に苛まれ、読み手に不条理さや虚無感を与える唯一無二の絵本作家である。日本ではゴリーが死去した2000年以降に河出書房新社から本が出版され、「エドワードゴリーを巡る展」を始めとした展示が数多く行われている。



G

 orey's style.

【言語表現】『うるんな客』を始めとした、リズム感のある言葉使いと、登場人物に起こる不幸な出来事を淡々と描写することが読み手をゴリーの世界へ引き込んでいる。
 【視覚表現】ヴィクトリア朝の影響を受けたゴリーは、壁紙や服装を始めとする緻密な線画の「背景」を描き込み、「何もない空間」（白い人や白いモノ）を引き立て、浮かび上がらせる。描き込みによる強弱は、挿絵において重層性を生み、不安を強調させる。これらから、ゴリーの表現方法は一定のルール【定形性】の中に一癖ある引っ掛かり【意外性】が組み合わさってきたものと言える。

When they uncovered the hill on that wild winter night,
There was no one expected—and no one in sight.

嵐強く、雪も降り、その夜
べには見せしめ、もどき無
文章【言語表現】

挿絵【視覚表現】

P

 rocess 絵本の構成や描写を抽出し、分析をもとに実空間へ変換する

phase A. 絵本の構成要素抽出	phase B. 言語と視覚の表現方法	phase C. 建築空間へ読み替え
<p>見開き2ページで、右ページに挿絵、空いた空間に文章が描かれている。挿絵と対照的な大きな余白が目立つ。</p>	<p>言語表現 26音のアルファベット順に子供の名前が並ぶ 視覚表現 子供たちが悲劇にあった後の様子が描かれている</p>	<p>建築空間 日常のどこかで起こる姿をただ見守ることしかできない。</p>

T ransforming picture books into architectural spaces

どの絵本でも、大きく余白のある紙面に対して密度のある絵の面積が非常に少ないことが、ゴリーー絵本の特徴である。また、挿絵は登場人物の視点ではなく、それ以外の第三者の視点から客観的に見たような描き方をしている。そのため、紙面の大きな余白は絵本と読み手を隔てる「枠」のような役割を持っている。

	題名	出版年	ページ数	言語表現(文字)	視覚表現(挿絵)
1	うろんな客 【The Doubtful Guest】	1957年	14ページ(見開き)	1ページあたり2文で構成され、文末が対句表現される。日本語訳ではリズム感のある短歌が採用された。	挿絵の輪郭がぼやけている。また家族と客人との距離感を壁の距離感で示す。
2	不幸な子供 【The Hapless Child】	1961年	30ページ(見開き)	映画『パリの子供』をもとに描かれ、裕福な子供が不幸のどん底に突き落とされる。	どの背景面にも小さな怪物の姿が描かれ、少女に起こる悲劇的な展開を暗示している。
3	ギャシュリークラムのちびっ子たち 【The Gashlycrumb Tinies; or, After The Outing】	1963年	26ページ(見開き)	A~Zの子供が悲惨な出来事を迎える絵本。	子供たちが悲劇にあった後の様子が描かれている。
4	ウエストウイング 【The West Wing】	1963年	30ページ(見開き)	音のない絵本。	とある西棟の部屋で起きた奇妙な出来事の切り取り。
5	華々しき鼻血 【The Glorious Nosebleed; Fifth Alphabet】	1975年	26ページ(見開き)	A~Zで始まる副詞が主役の文章。めったに聞かない単語が並ぶ。	ページごとに異なる物語が展開される。不幸な場面もあれば、それを予期させる描写が多い。
6	おぞましい二人 【The Loathsome Couple】	1977年	30ページ(見開き)	実際の事件をもとに描かれた。犯人をモデルにし、2人の主人公の話が交互に進む。	事件が進むごとに背景の単調な線にまだらな模様がついていく。
7	狂瀾怒濤 【The Raging Tide; or, The Black Doll's Imbroglia】	1987年	30ページ(見開き)	読み手が興味の有無で次のページを選択でき、異なるストーリー展開に誘導する。	4人の登場人物が闘うときは背景に荒れた雲の描写、一緒に楽しんでいるときは室内の単調な模様で描写される。

ゴリーー絵本の構成要素から建築要素への変換



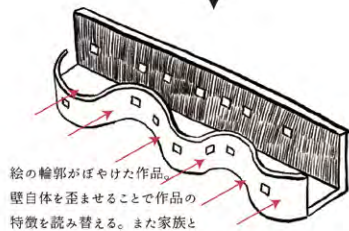
文章【言語表現】 挿絵【視覚表現】

背景→内壁...ゴリーーの作品で象徴的な線画のデザイン

枠→展示壁...絵本の見開きのように絵を飾く

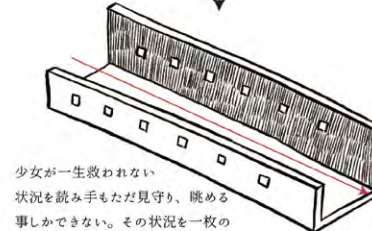


①うろんな客



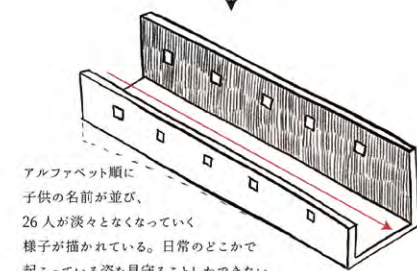
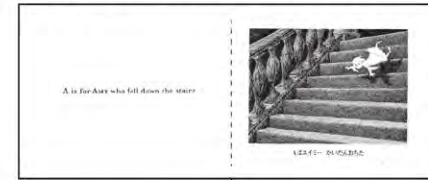
絵の輪郭がぼやけた作品。壁自体を歪ませることで作品の特徴を読み替える。また家族と客人との距離感を壁の距離感で示す。

②不幸な子供



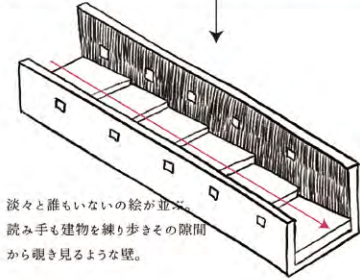
少女が一生救われない状況を読み手もただ見守り、眺める事しかできない。その状況を一枚の大きな白い壁で繋ぐ。

③ギャシュリークラムのちびっ子たち



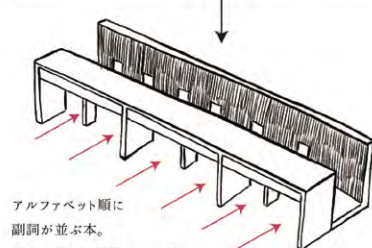
アルファベット順に子供の名前が並び、26人が徐々に小さくなっていく様子が描かれている。日常のどこかで起こっている姿を見守ることしかできない。

④ウエストウイング



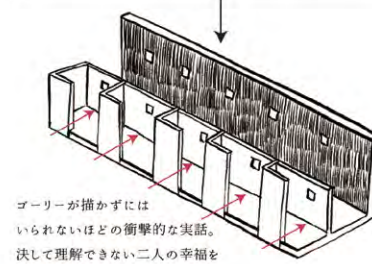
淡々と誰もいない絵が並び、読み手も建物を練り歩きその隙間から覗き見るような壁。

⑤華々しき鼻血



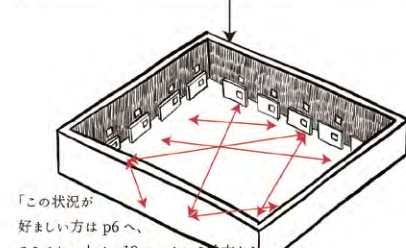
アルファベット順に副詞が並ぶ。他の本に比べ残酷なコマが比較的少なく子供の表情も豊かな描写が多い。

⑥おぞましい二人



ゴリーーが描かずにはられないほどの衝撃的な実話。決して理解できない二人の幸福を囲われた壁で見せる。

⑦狂瀾怒濤



「この状況が好ましい方はp6へ、そうでない人はp10へ」という絵本ならではの読みたいページに飛べるような展示形式とする。

S

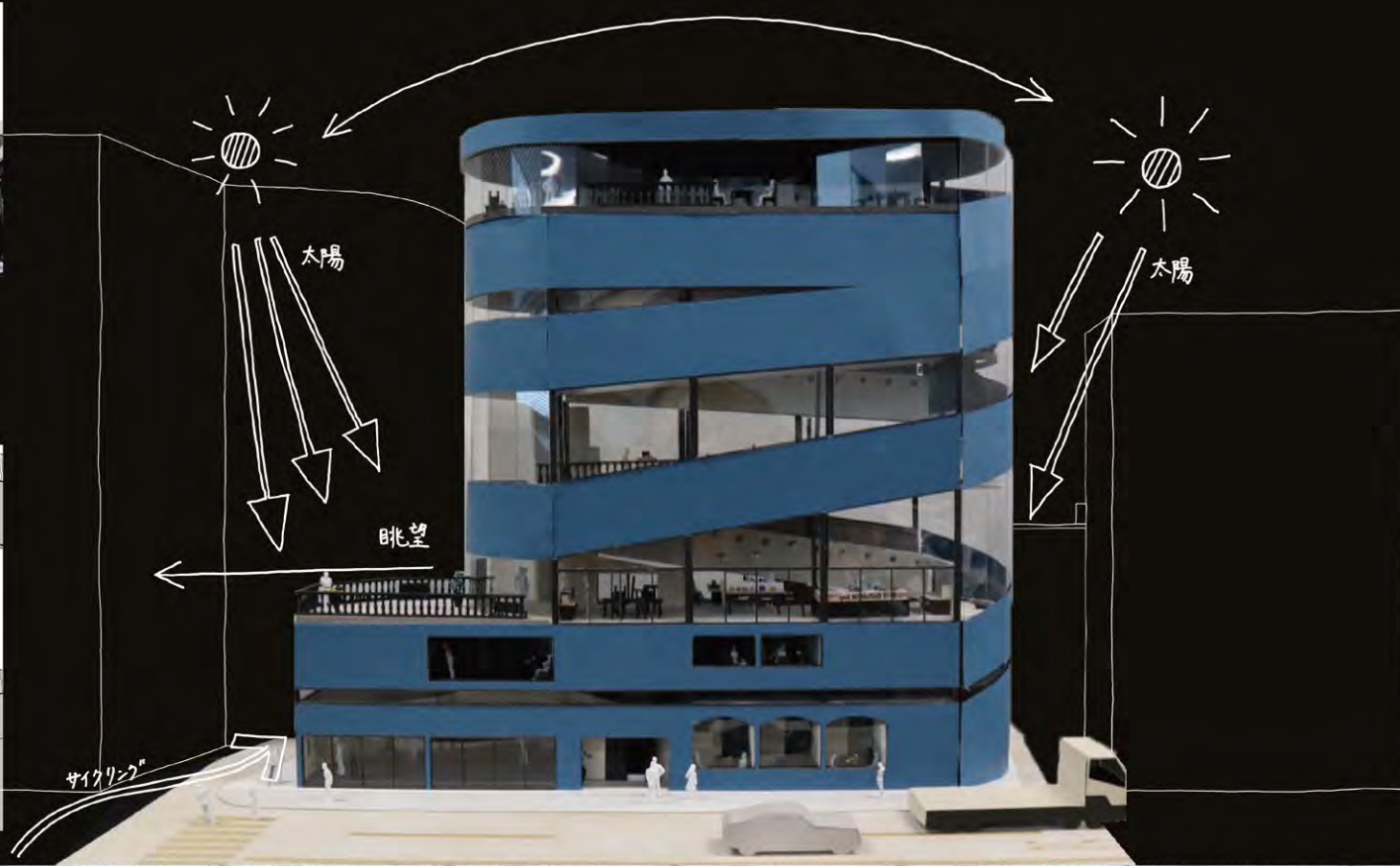
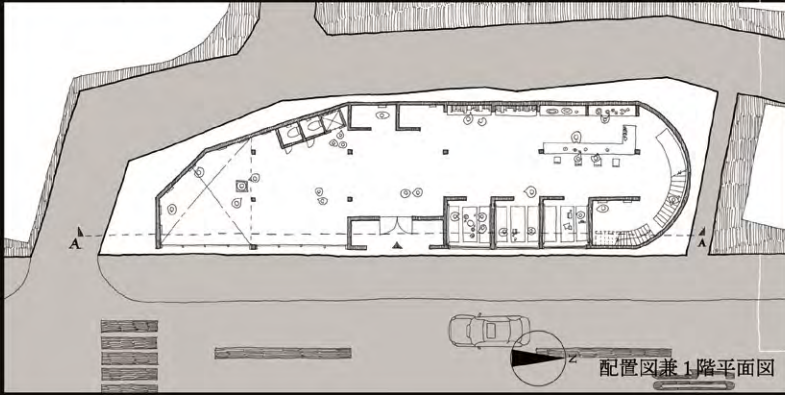
ite

●河出書房新社（出版社） 東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2
ゴリーアの書籍の日本語訳版を出版している会社。従業員数74名。
現存する建物は7階建てで、都心部に位置する。多くのジャンルを扱う
出版社である一方で、オフィス空間は閑静なビルとなり、唯一階のカ
フェ部分が出版社と周辺の人々と本の接点を持つ空間である。



L

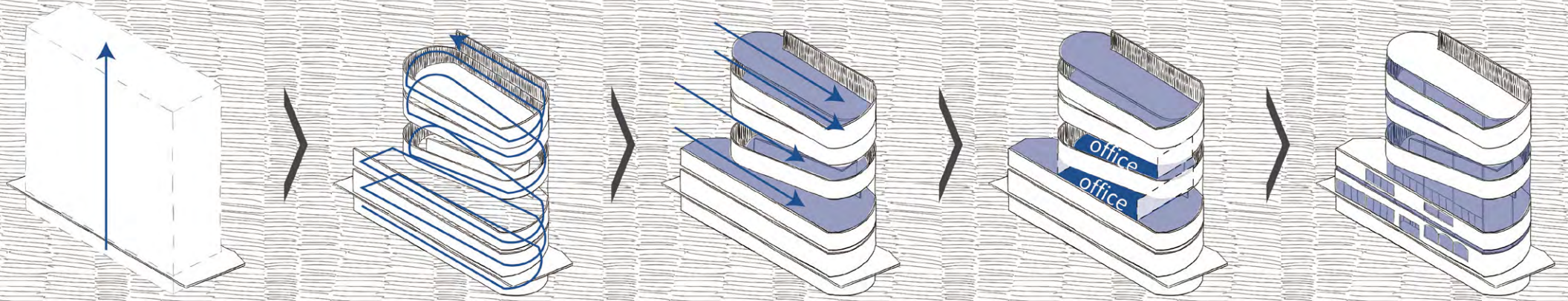
ayout plans, floor plans



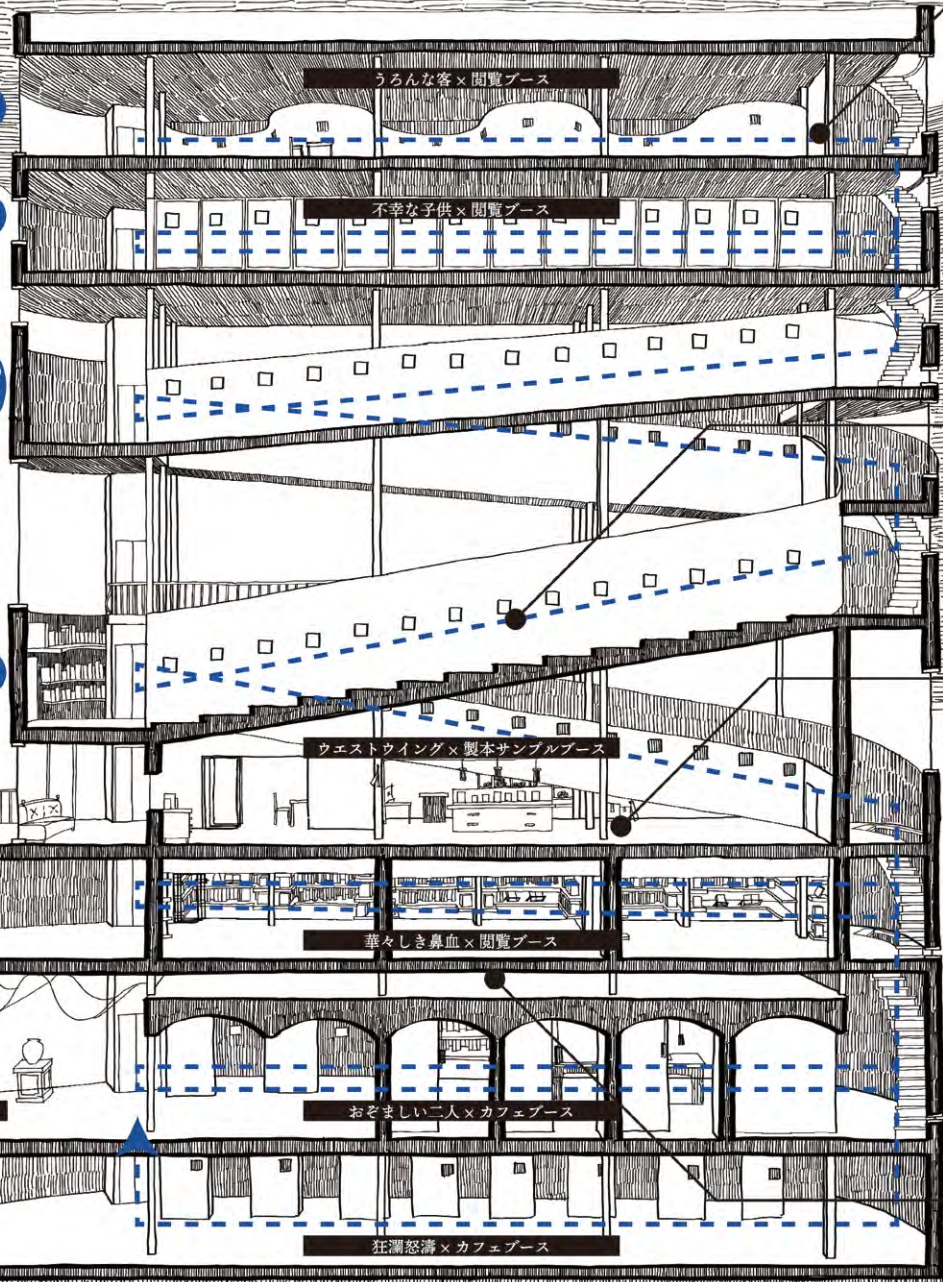
D

igram

美術空間は選定した7冊の絵本を出版された年代順に展示する。巡回形式は「接室順路型」で、絵本のページを一筋の道でつなぐようにする。
ただ展示室同士を繋ぐだけでなく、各絵本の展示の隙間をオフィスに関わる機能を挿入することによって、クリエイティブな空間を創出し、働く人の創造性を刺激する。



- ① うるんな客
- ② 不幸な子供
- ③ ギャシュリークラムのちびっ子たち
- ④ ウェストウイング
- ⑤ 華々しき鼻血
- ⑥ おぞましい二人
- ⑦ 狂瀾怒濤



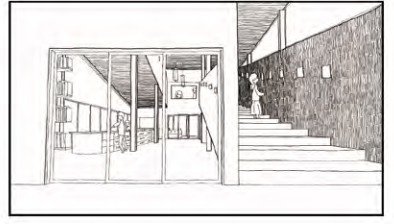
【8階 展示ブース】
湾曲した展示壁によって作中の登場人物同士の距離感やリズム感を表現。展示壁越しだけではなく、挿絵単体でも楽しめる2通りの楽しみ方ができる。



【4階 会議ブース】
ここでは『ウェストウイング』の展示が隣り合う。会議の休息時に展示を眺める。また、階段状に伸びる展示空間と交錯することによって、展示壁の上から挿絵を臨んだり違う角度で閲覧する。



【3階 製本サンプルブース】
本の製本に使用する紙の種類や大きさを確認できるブースを設ける。ここでは働く人にとっては出版の手助けとなることはもちろんのこと、隣り合う『ウェストウイング』の展示空間は文章がない製本のため、絵画として眺めることができる。ここで生まれる陰と陽の空間性は、読み手側に日常に起こる出来事を示唆させ、ゴリーアの挿絵に描かれる重層性が現れる。



【2階 閲覧ブース】
『華々しき鼻血』で出るAからZの珍しい副詞から河出書房新社が出版した本を検索する。ゴリーアの独特な言い回しで表される文章は、出版社で働く人にとってデスクワークでは得られない言葉の出会いを生み出すアート空間となる。来館者にとってはゴリーアの絵本を読み返したり、新たな本を開拓したりと新たな出会いを誘発する。



モノクロ以外に『キノコのような色使い』を表紙やポスターに使用するゴリーアの表現が外装に現れる

ヴィクトリア朝(1837年6月-1901年1月)をテーマに描くゴリーアの作品から、建築の要素としてアーチの開口部を取り入れる

”みんなを不安にするのが好き”なゴリーアによる陰鬱な気分を表現する陰影のついた内部空間